

# 輸出産業から輸入産業に転化した真珠産業

専任研究員 出村雅晴

## 1 はじめに

真珠産業は、真珠養殖事業法(1952年制定)の第1条で「この法律は、真珠貝及び真珠の養殖を助長し、並びに真珠の品質の向上を図り、もつて真珠の輸出の促進とこれによる国民経済の発展とに寄与することを目的とする」とうたわれたように、もともと海外市場を販売対象として産業振興が図られてきた経緯がある。戦後、生産量の飛躍的な拡大とともに輸出も大きく伸長し、まさに輸出の花形産業と位置づけられるに至った。その後、いわゆる真珠不況(一般に67~72年とされる)を経ながらも、基本的にはアコヤ真珠<sup>(注1)</sup>の供給力を背景に、近年までその地位を保持してきた。真珠の重さを量る国際単位として「匁<sup>もんめ</sup>」が採用されていることがその証である。

しかし、今や状況は一変し、かつて外貨獲得の重要産業とされた真珠産業も、現在では輸入量が生産量を上回り、また輸出量を大き

く上回るなど、輸入産業に転化している(第1図)。本稿では、こうした状況変化を整理し、その背景を明らかにする。

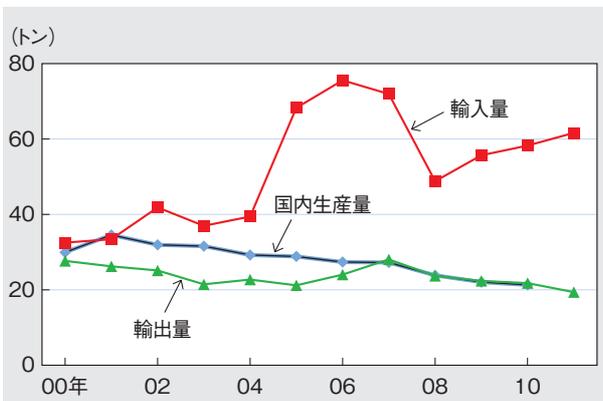
## 2 真珠産業の概況

67~72年の真珠不況は、需給関係を見放した過剰生産や品質の低下がもたらした海外市場における買い控えが原因であり、生産自粛や下級真珠の廃棄、あるいは調整保管など業界対応を余儀なくされた。政府も、「真珠養殖等調整暫定措置法」(69年施行)を制定して生産調整をバックアップしたが、この真珠不況を通して生産量は約4分の1、経営体は約2分の1に縮小した。

その後、国内の高度経済成長と海外市場における需要の増加を背景に、生産量は60トン、浜揚げ真珠の生産金額も600億円を超えるまでに回復した。80年代後半には国内需要の伸び悩みから生産金額も一時500億円程度に落ち込んだものの、バブル景気の到来とともに真珠保有者層の拡大、大珠などの高額品の需要増大などを背景に、90年代前半は800億円前後で推移した。南洋真珠(シロチョウ真珠、クロチョウ真珠)が市場に登場したのもこの頃である。

しかし、90年代後半に発生した真珠母貝の異常斃死問題を契機とした国産アコヤ真珠の品質低下、海外諸国におけるアコヤ以外の真珠(南洋真珠等)生産の拡大、あるいは淡水真珠のサイズや品質の向上等からアコヤ真珠の販売不振が続き、現在では生産量20トン強、生産金額100億円前後の生産規模となっている。

第1図 真珠の生産量と輸出入量の推移



資料 国内生産は農林水産省「漁業・養殖業生産統計年報」、輸出入は財務省「貿易統計」から作成  
 (注) 輸出量は「未加工・バラ玉以外」(品目コード7101-21-900)を除いたもの。

### 3 加工真珠の流通

真珠製品の流通構造は、真珠の種類によって異なる。アコヤ真珠の場合は国内産がほとんどを占め、基本的には国内消費と輸出がほぼ半々という状況である(2000～10年平均では48:52と試算される)。輸出する真珠の形態は、ネックレス用に穴を開けて一時的に糸を通した状態のもの(「通糸連」と呼称される)が一般的で、かつては9割以上を占めたが、直近ではおおむね6割程度となっている。

また、南洋真珠に関しては、輸入した真珠を国内で加工して、国内消費あるいは輸出に仕向けるのが基本的なパターンである。年による変動はあるが、国内消費向けが7割程度を占めるとみられる。シロチョウ真珠の主な輸入先はオーストラリアとインドネシア、クロチョウ真珠はフランス領ポリネシアである。淡水真珠の場合も、輸入した真珠を国内で加工するという点では南洋真珠と同じだが、こちらはかつて2割程度を占めた輸出が大きく減少し、05年以降はほとんどが国内消費向けとなっている。淡水真珠の主な輸入先は中国である。

(注1)アコヤガイを母貝として生産される真珠。シロチョウガイの場合はシロチョウ真珠と呼ばれる。

(注2)「バラ玉以外の形態で輸出される未加工の養殖真珠」(品目コード7101-21-900)はほとんどがアメリカ向けであり、ハワイやサンディエゴなどの観光地でみやげ物として販売される。いったん採り出した真珠を貝に戻し、その貝をホルマリン等に漬け込んだいわゆる缶詰形態で輸出されるものであり、重量で表示される輸出数量においてはかさ上げ要因となる。したがって、真珠輸出を数量ベースで把握する場合には、この分を通常の輸出形態における重量に換算する必要があるが、本稿では便宜上これを除いてその動向を整理した。貿易統計において、当該品目コードのデータが確認できるのは00年以降のため、00年と10年との対比で整理した。

### 4 真珠の輸出動向

貿易統計(数量ベース)から輸出をめぐる動向を整理する。<sup>(注2)</sup>年間の輸出合計数量は27.6トン(00年)、21.8トン(10年)と漸減している。輸出品目を大きく未加工品、加工品、製品に区分してその内容をみた場合、製品輸出の割合が低下(20.2%→8.1%)し、その分未加工品輸出の割合が高まっている(15.2%→31.2%)。とりわけ、主にわが国で産出されるアコヤ真珠においてこの傾向が顕著である。

こうした変化は、当然のことながら輸出先の変化にも反映する。主な輸出先は香港、アメリカ、ドイツをはじめとするEU諸国、スイスなどであるが、なかでも香港の台頭が顕著である。同国向けの輸出数量は9.6トンから14.3トンに増加し、これに伴って全体に占める同国向け輸出割合も34.7%から65.5%へと大きく増加している。香港は古くから中継基地として位置づけられてきたが、その台頭は、かつてわが国が担ってきた流通基地としての機能が香港にとって代わられたことを意味する。業界関係者は、この点に関して「関税」と「地理的条件」(南洋真珠生産地との近さと中国をにらんだもの)における香港の優位性を指摘したが、真珠養殖技術の開発以来100年余の長きにわたって養殖真珠の主たる供給国として世界に君臨してきたわが国は、今や輸入国へと変貌を遂げた。真珠産業の発展を支えてきた真珠養殖事業法の廃止(98年)はそれを象徴するものといえよう。

輸入産業化時代の真珠養殖業はどうあるべきか、生産技術を含め、あらためてその生産体制のあり方が問われている。

(でむら まさはる)